様式第１号（第１０条関係）

2022（令和 4）年度業務実績報告書

提出日　2023（令和 5）年 1 月 19 日

１．職名・氏名　　教授・木野龍太郎

２．学位　　学位　博士（経営学）、専門分野　工業経営論・生産管理論、
授与機関　立命館大学　、授与年　1999 年 3 月

３．教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
生産管理論Ⅰ（2）3 年生配当

② 内容・ねらい
モノづくりの技術（生産技術）のなかの製造技術を取り扱い、モノづくりの歴史的な流れを概説したうえで、トヨタ生産方式に代表されるような、日本の製造技術の特徴について講義を行う。管理手法そのものだけでなく、日本企業の持つ競争力と、それを支える技術という側面に着目して、進めていっている。モノづくりに関する基礎知識と歴史的経緯、そして日本の代表的な生産方式であるトヨタ生産方式の仕組み、さらに日本の高品質なモノづくりの土台となっている品質管理手法について学ぶことで、日本の製造技術の発展の経緯や、その競争力の源泉などについて、理解を深めることを目標としている。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
1. 本年より対面講義を再開しているが、遠隔講義で使用していたツールを併用することで、理解を深める取り組みを行っている。
2. 具体的には、Google Classroom（以下、GC）を主な授業支援ツールとして活用し、配付資料や連絡事項も全て GC にアップロードし、復習がやりやすく出来るように受講生の利便性を図った。関連するウェブサイトや動画資料などを GC にアップロードし、予習・復習などに活用出来る工夫を行っている。
3. 講義内容については、工学的知識をあまり持たない学生であっても理解できるように、なるべく難しい専門用語を使うことは避けた説明を行った。
4. 基本的な事項をきちんと理解できるように内容を絞り込んだうえで、講義の復習を促すために毎回の小テストを実施し、単元ごとに提出課題を課すことで、知識の定着を図っている。出席者からは講義の復習になり、理解が深まる、といった肯定的な感想が出されている。
5. 授業の内容をサポートする形で動画資料を積極的に活用し、講義内容と関わらせながら解説を行うことで、内容の理解を深める取り組みを行っている。また、必ず感想文を書かせて内容の定着を図るとともに、その内容を授業にフィードバックすることも行っている。上述のように、動画資料は GC にアップロードして何度も見直しが出来るようにしている。当該科目の分野については、学生が日常触れる機会が少ないことから、動画を視聴することで講義内容の理解が深まり関心が高まった、という肯定的な感想が多く見られている。
6. 主に福井県内の製造企業の経営者や若手社員をゲストスピーカーとしてお招きし、会社概要やその会社の取り組みに加えて、実際にどのような仕事をしているのかについてもお話頂くことで、経営学の勉強だけでなく将来の進路を考えるうえで役立つようにしている。今年度は本学卒業生をお招きしてお話頂いたことで、学生がよりイメージしやすくなっている）。
☆本年度ゲスト講義：株式会社日本エー・エム・シー（福井市）2022 年 7 月 25 日実施
福井県は特長ある技術を持った製造企業が多いため、そうした事例は経営学を学ぶうえでの最高の教材であると考えて、それぞれの事例を講義内容と関わらせながら進めていくことでイメージが持ちやすくなり、講義内容をより深く理解することにつながっている。その結果、学生が福井県内の製造企業に関心を持ち、紹介した企業に就職している例も見られている。また、ゲストスピーカーが所属する企業は、一般の学生にはなかなか馴染がない企業であることから、採用活動に関する積極的なアピールとして活用することが出来て、双方にメリッ

トがある取り組みとなっている。
【ゲストスピーカー　1名】

7. 4. の小テスト及び確認テスト、5.の動画資料活用、6.のゲスト講義においては、学生の意見を取り込むとともに、質問には電子メールを使って回答するなどによって、双方向的な講義を心がけており、一方向的な講義にならないようにしている。
8. 講義内容が現実の社会とどのように関わっているのかを、学生が理解しやすくするために、しばしば新聞記事などを資料として配布し、理解をさらに深められるようにするとともに、新聞から積極的に知識を吸収することを促している。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
生産管理論Ⅱ（2）3年生配当

② 内容・ねらい
「生産管理論Ⅰ」で学んだ製造技術に関する知識を踏まえて、本講義では製品技術を主に取り扱い、日本の製造企業における研究開発体制の特徴と、サプライヤー（資材・部品供給会社）との企業間関係の態様、そして製造業における人材育成や管理と、その背景にある労使関係などについて学ぶ。日本のモノづくりにおける製品開発・購買管理についての知識を深め、それが製造企業の競争力とどのように関わっているのか、またモノづくりの土台ともいえる人事管理・人材育成について学ぶことで、「生産管理論Ⅰ」「生産管理論Ⅱ」とあわせて、日本のモノづくりの技術の全体像とその特徴、競争力との関係について理解を深めることを目標とする。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
1. 基本的な進め方は「生産管理論Ⅰ」と同じだが、主な受講生である 3 年生が就職活動の直前であることもあり、特に福井県内において盛んな製造業への就職活動を行う際に、知識として役立つ内容を盛り込むことで、学生の進路選択に役立たせるとともに、学習意欲の向上も図っている。
☆本年度ゲスト講師：シンフォニアテクノロジー株式会社　2023 年 1 月 30 日実施予定
（同社代表取締役会長・本学客員教授 武藤 昌三 氏と若手社員による講義）
【ゲストスピーカー　2名】

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
基礎ゼミ（2）2年生配当

② 内容・ねらい
「モノづくり」を行う企業の経営活動についての資料を読むことによって、企業経営全般について学ぶ。具体的には、資料に基づいて受講者が報告を行い、そこで提示された論点について議論を行っていくことによって、企業経営活動に関する知識を深め、また、資料作成の方法、経営学的な視点、ディスカッションの方法について学ぶ。企業経営（特にモノづくり）に関する知識を深めるとともに、論理的な思考方法や、ディスカッション、プレゼンテーションなどに関するスキルも、高めていけるようにすることが目標である。加えて、これらを学ぶことで、今後の学習計画策定、進路決定につなげていけるようにする。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
1. 受講生は、テキストに基づいて分担して報告資料を作成し報告を行う。報告者は、報告のなかでそのテーマに関する「論点」を提示し、議論を行うためのたたき台を提示する。
2. 報告資料は事前に担当教員がチェックを行い、問題がある場合は再提出を求めて、ディスカッションのベースとなりうる資料になるまで徹底して指導を行っている。
3. 報告者のほかに、司会、書記及び議事録作成についてもそれぞれの受講生が担当して、ディスカッションを行っていく。司会は受講者全員がきちんと議論に参加して意見を述べそれらを整理し、それを全体で共有化できるように書記がまとめていく。議事録作成担当は、そうした内容をまとめて次回に報告し、どのような報告、議論が行われていたのかをきちんと残すようにしている。それぞれを全員が担当するようにローテーションさせて、こうした能力を高めていけるようにしている。
4. なるべく受講生が企業経営の全体像を掴み興味を持ってもらえるように、テキストは平易かつ全般的な内容であり、なるべくアップデートな内容のものを選ぶようにしている。
5. 演習Ⅰ、演習Ⅱの受講生とともに、主に福井県内の製造業を対象とした企業訪問を行うことで、企業経営の実態を知る機会を提供するとともに、今後の学習計画や就職活動に役立てら

れるようにしている。
☆本年度企業訪問：株式会社 TOP（越前市）2022 年 7 月 18 日実施
【フィールドワーク等　1 件】

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
外書講読Ⅰ（2）2 年生配当

② 内容・ねらい
企業のアニュアルレポート（英文）を用いて、モノづくりに関わる英語を日本語に訳して輪読しながら、補助資料による補足説明や、そのテーマに関する議論なども交えて、モノづくりを行う企業の経営について学んでいく。多読よりもむしろ精読に重点を置き、中学や高校で学んできた英文法などについても復習を行いつつ、英文を正確に理解する力をつけることを目標とする。テクニカルタームについてきちんとおさえながら、モノづくりを通じた企業経営に関する知識を高めていく。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
1. 高校レベルの英語の知識についてもきちんと復習を行い、文法的な説明も行うことで、英文を正確に読み・書くという能力を高めるようにしている。これは、受講生が経営に関する知識を持ち、それに関わる英文を読み、書くという能力の土台作りとなり、将来的に海外とのビジネス・コミュニケーションにおいて、英語の書面や電子メールでのやりとり行えるようにすることにつなげる、という意味も持っている。
2. テキストは、トヨタ自動車株式会社のアニュアルレポートを使用している。同社は学生にとって身近な企業であることから理解しやすく、企業経営全般の知識を高めることにつながると考えるからである。企業経営に関わるテクニカルタームについては、その内容もきちんと説明し、今後の専門科目の履修に役立つようにしている。
3. 初回と最終回に関連する内容のビデオを放映し、企業活動のグローバル化をイメージ出来るようにすることで、学習への動機付けを行っている。
4. 毎回、必ず全員にあてるようにしており、学習への緊張感を高めるとともに、授業に積極的に参加するようにさせている。
5. 学習した内容については毎回小テストを行い、英単語及び英文和訳をさせることによって、受講生がきちんと復習することを促している。
6. 最終レポートは、半年間のまとめを英語で記述する方式にすることで、全体の復習と英作文の能力を高めることに取り組んでいる。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
演習Ⅰ（2）3 年生配当

② 内容・ねらい
前期は共通テキストを用いてモノづくりの基本的な仕組みを学ぶ。後期からは、自分自身の学問的関心に基づいてテーマを設定し、各自が調べてきた内容をゼミで報告し、議論をしていきながら、卒業論文の基礎となる部分を作り、演習Ⅱの卒業論文作成につなげていく。
ねらいの 1 つは、モノづくりに関する様々な知識や考え方を学び、また、それに関して議論を行うことによって、企業経営や経済の動向に関する知識を深めるとともに、論理的な思考や分析が出来るようになることである。もう 1 つは、卒業論文の作成に向けて準備を行っていくなかで、各自がテーマを設定し、資料を調べてまとめるなど、受動的な学習から脱却し、自らの問題意識に基づいて、物事を探求することができるようになることである。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫

1. 前期では、受講生はテキストに基づいて報告資料を作成し報告を行う。報告者は、報告のなかでそのテーマに関する「論点」を提示し、議論を行うためのたたき台を提示する。なお、報告資料は事前に担当教員がチェックを行い、必要に応じて再提出を求めて、ディスカッションのベースとなりうる資料になるまで徹底して指導を行っている。
2. 製造現場にて撮影したビデオを用いて時間計測の実習を行い、計測したデータを基にして、現場改善につなげるための図表等を作成、改善案を提案させるということを行っている。現場作業の大変さや、工程設計の実態の理解、作業のムダを無くすことの重要性を理解させることにつなげている。
3. 後期には、卒業論文作成のための構想案作成および資料収集を行い、進捗状況を報告していく形を取る。卒業論文はあくまでも学術論文であるという位置づけから、単なる既存文献の知識をまとめただけではなく、必ず「新しい知見」の発見を求めている。そのためには、既存の研究成果をきちんとおさえたうえで、その研究の学術的・社会的な意義や歴史的経緯を踏まえて取り組むよう指導している。具体的には、自分自身でテーマを決め、卒業論文の構想案を作成したうえで、半年間で複数回の報告を義務づけて、資料の作成・報告・ディスカッションを行っている。こうした作業を通じて、大学における「学び」の意味を理解し、また論理的な思考力を高めていけるようにしている。そのため、ゼミで使用する「学術論文の作成要領」を別途作成し、学術論文とはどういうものか、一般的な文章との違いは何かということから、具体的な記述方法、資料収集の方法などについても詳細に説明し、学生に配布するとともに、オフィスアワーなどを活用して別途指導を行うことでフォローを行っている。
4. 主に福井県内の製造業を対象とした企業訪問等を行うことで、企業経営の実態を知る機会を提供するとともに、今後の学習計画や就職活動に役立てられるようにしている。訪問した福井県内企業には本学の卒業生・修了生が勤務しており、経営学の学習だけでなく就職に際しての心構えやアドバイスなどをもらうことができた。また、自分自身の研究・教育に関するネットワークを拡げることにもつながった。

・第一織物株式会社（坂井市丸岡町）2022 年 7 月 14 日実施　**※福井市商工労働部商工振興課との連携事業**
・株式会社 TOP（越前市）2022 年 7 月 18 日実施
・福井県工業技術センター（福井市）2022 年 11 月 17 日見学
・北陸技術交流テクノフェア（福井県産業会館）2022 年 10 月 20 日見学
・株式会社武田機械（坂井市）2022 年 1 月 31 日見学予定
【フィールドワーク　5 件】

①　担当科目名（単位数）　主たる配当年次等

演習Ⅱ（2）3 年生配当

②　内容・ねらい

受講生は、「演習Ⅰ」で学んだ内容を基にして、各人が設定した卒業論文のテーマに沿った形で、論文の構想案（問題意識、目的と意義、課題、方法、章構成など）を作成し、必要な資料を収集して、ゼミにて報告を行う。そこでの議論を通じて問題意識を明確にしていく。また、これらを踏まえて受講生には実態調査（企業などへのヒアリング）も実施するように指導している。ゼミでの報告・議論を通じて内容を詰めて、方向を明確にしていきながら卒業研究を進め、最終的に論文を仕上げることが出来るようにする。ここでは、卒業論文の作成を通じて、論理的な思考能力を高めるとともに、そのことを文章としてどのようにしてまとめていくかという、文書作成能力についても高めていくことを目標としている。

③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫

1. 主に福井県内の製造業を対象とした企業訪問等を行うことで、企業経営の実態を知る機会を提供するとともに、今後の学習計画や就職活動に役立てられるようにしている。

・株式会社フィッシュパス（坂井市丸岡町）2022 年 5 月 20 日実施
・福井・越前のほんもの手仕事展（越前市）2022 年 6 月 10 日実施
・第一織物株式会社（坂井市丸岡町）2022 年 7 月 14 日実施
・株式会社 TOP（越前市）2022 年 7 月 18 日実施

・福井県工業技術センター（福井市）2022 年 11 月 17 日見学
【フィールドワーク　5 件】

2. 卒業論文作成においては、必ず実際の企業への聞き取り調査を行うように指導しており、あわせて「インタビュー調査の実施要項」を作成し、受講生に配布している。これによって、講義で学んだ知識が企業経営の現場とどのようにつながっているかを、より深く知ることが出来るとともに、調査対象の選定、アポ取り、質問状の作成、原稿の内容確認といった一連の手続きを行うなかで、社会に出たときに役立つようにしている。これを通じて、文書作成からビジネスマナーに至るまで詳細に指導しており、社会にでも役立つと考えている。
3. 「学術論文としての卒業論文」という位置づけを明確にしており、論文の体裁や引用の方法、文章の記載方法などについて詳細に指導している。中身についても、先行研究のフォローや新しい知見の発見に重きを置いている。そのため、早めにテーマ設定を行い、通常のゼミの時間以外でも頻繁に個別指導を行うなどすることで、大学での学習の集大成としての卒業論文を、より良いものにするようにしている。
4. 卒業論文報告会を実施し、卒業論文の内容についてパワーポイントで作成・説明をすることを通じて、プレゼンテーションの経験も積ませるようにしている。また、報告会にはゼミの後輩も参加し、次年度の参考になるようにしている。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
特別企画講座 E（2）3 年生配当

② 内容・ねらい

1. 福井県は合成繊維テキスタイルの一大産地として知られており、世界的な評価も高い。福井産地には、テキスタイル生産に関連するほぼ全ての工程が揃った繊維産業クラスターが形成されている。さらに、繊維に関わる技術を応用して他産業に展開した企業も多く見られており、福井県は繊維を基盤として発展してきた地域といえる。本講義では、繊維産業に関わる人々の生の声を聞きその実態について知見を深めるとともに、繊維産業を基盤とした地域産業集積・発展について学ぶことを目的としている。
2. 福井産地を事例として、日本経済発展の礎となった繊維産業について知識を深めるとともに、それを技術的基盤として他の産業にどのようにして展開されてきたのかを学ぶ。
3. それぞれの企業がどのようにビジネスを展開しているのかについて知ることで、地方企業における経営戦略の特徴について学ぶ。
4. 若手社員のお話を聞くことで、モノづくりの現場では実際のどのような業務が行われているかを知り、就職活動における業界研究・職種研究など、将来の進路選択に役立てる。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

1. 「福井で学ぶ、福井でしか学べない経済学・経営学」をコンセプトとして、大学で学んできた経済学・経営学の内容が、実際の企業経営とどのように関わっているかについて、実務に携わっている方のお話を通して伺うことで、実際に触れて、感じて、楽しみながら理論と実践とをバランスよく学ぶとともに、地元企業への理解を深め、将来の進路選択に役立てるという、2 つの目的の同時達成を目指している。
2. 経営者層だけではなく、本学卒業生を中心とした若手社員にもお話をして頂くことで、仕事のイメージを持ちやすくして、就職への意識を高めることで、企業と学生とのマッチングをより進めやすくして、地元への人材定着に結びつけている。
3. ゲスト講師については、これまでの繊維産業に関する調査研究活動を通じて知り合った企業に、全て直接訪問して講義内容の趣旨説明を行い、本講義の趣旨をご理解頂いたうえで、講義内容についても打ち合わせを行いながら進めることで、あくまで経済学・経営学の学修の充実という点を基盤としつつ、地域理解、人材定着にも役立てるという講義のコンセプトが貫徹できるように取り組んでいる
4. 福井には、モノづくりの経営学を学ぶうえで「最高の教材」といえる企業が多く存在し、また企業と大学とが近い関係にあることから、モノづくりをより身近に学ぶことが可能となっている。そして、大企業の事例が取り上げられることが多いこれまでの経営学とは異なり、地方都市である福井で学ぶ、福井でしか学べない経営学を学ぶことが出来る点も重要であろう。これによって、教科書的な経営学を相対化して分析・考察するとともに、実

態に触れながら学ぶことで、経営学をより深く学ぶことにつながっている。

5. 具体的な講師リストは下記の通りである。繊維産地を事例として地方企業の経営戦略など（経営学的視点）について学ぶとともに、前半が繊維産業、後半が繊維をルーツにして展開を図ってきた企業という形にすることで、技術を起点とした産業発展の流れ（経済学的視点）をイメージしやすくしている。

・第一織物株式会社（織布・ファッション衣料）
・大喜株式会社（織布・カーシート）
・冨士経編株式会社（経編・メディカル衣料）
・株式会社ミツヤ（染色加工・CFRP）
・福井経編興業株式会社／イーゲート株式会社（経編、縫製・女性下着）
・株式会社 K2 アドバンスト（情報産業）
・前田工繊株式会社（織布・ジオテキスタイルなど）
・株式会社 SHINDO（細巾織物・CFRP）
・倉茂電工株式会社（電線製造）
・株式会社武田機械（工作機械製造）
・株式会社八木熊（繊維・化学品卸、樹脂製品製造）
・日華化学株式会社（化学・助剤、化粧品等製造）
・フクビ化学工業株式会社（建築資材、樹脂製品製造）
・セーレン株式会社（原糸製造、織布、染色加工等）

【ゲストスピーカー　30 名】※各講義で複数のゲストスピーカーが参加しているため

6. **福井商工会議所・繊維部会との連携事業**として、講師派遣及び広報の点でご協力頂きながら進めている。
7. 企業の方々には、終了後に学生の感想と講義中に撮影した写真、動画をお送りすることで、講義内容へのフィードバックを行っている。
8. 就職活動を控えた学生も多いことから、その準備として大いに役立っているという感想が多く見られる。また企業の方々からも、技術力もシェアも高いにも関わらず、BtoB ということで学生への知名度が低いことが多いため、就職という意味でも今後のビジネスという点でも、会社のことを学生に知ってもらえる良い機会になったということで、非常に喜んで頂いている。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等
専攻演習Ⅰ（2）博士前期課程 1 年次配当

② 内容・ねらい

1. モノづくりの技術や競争力の具体的な中身とその形成過程、及びそれを支える企業間分業構造について知識を深めるとともに、それらを踏まえて各個人が研究テーマを設定し、「論文構想案・研究計画案」を作成する
2. 生産技術(製造技術・製品技術)を軸とした、モノづくりの競争力の具体的な中身と、それがどのようにして蓄積・発展してきたのか、それと関わって、関連する企業群がどのように関わり合ってきたのかといったことについて理解を深める
3. 学術研究の考え方、学術論文の形式などについての基礎知識を身につける
4. 研究の目的や意図を明確かつ誤解無く伝えるための文章力・表現力を高める
5. 修士論文執筆に向けた「修士論文構想案・研究計画案」を完成させ、研究の方向性を見定める
6. 企業などへの実態調査の実施計画案を作成し、調査に向けた準備を行う

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

1. 社会人院生が受講している状況だが、あくまで学術研究ということを基礎として進めており、先行研究をフォローや事例の取り扱い方、経営学的な位置づけについても徹底指導している。
2. 一方で、実務経験を踏まえた研究テーマとすることで、理論と実践とを組み合わせることで、実証研究としてのレベルを高めている。
3. 講義は夜間に遠隔形式で実施することで、受講しやすくしている。

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等

専攻演習Ⅱ（4）博士前期課程１年次後半 －２年次前半
②　内容・ねらい 1.　文献・資料のサーベイを行って先行研究をフォローし、専攻演習Ｉで作成した「修士論文構想案・研究計画案」を練り上げて、修士論文の方向性を定めていくとともに、企業などへの実態調査を実施し、その内容について分析・考察を行う 2.　企業などへの実態調査を実施し、その内容について分析・考察を行うことで実態について知見を深める。 3.　修士論文中間報告会の報告資料案を作成し、報告を行うことで、修士論文の進捗状況を確認するとともに、その方向性や内容について客観的な視点からチェックを行う。
③　講義・演習・実験・実習運営上の工夫 1.　基本的に「専攻演習Ｉ」と同じ進め方である。 2.　今年度については、過去の修了生をお招きして検討会を実施し、研究内容のブラッシュアップとともに、社会人院生としての研究活動の進め方などについてもアドバイスを頂いた。
(2)その他の教育活動
内容 1.　企業訪問については、教育活動の項目に記載しているが、こうした活動については、マスコミや本学 WWW サイトを通じて取り上げてもらうように、広報担当を通じて働きかけを行うことで、本学の活動を対外的にアピールし、大学そのものの広告宣伝につなげるとともに、本学学生の就職先開拓につながった。 ・『福井新聞』2022 年 7 月 16 日掲載（第一織物株式会社・企業訪問） ・『福井新聞』2022 年 10 月 13 日掲載（特別企画講座 E） ・『日刊工業新聞社』2022 年 10 月 19 日掲載（特別企画講座 E）**※全国紙** 2.　学生の課外活動としては、女子バレーボール部の顧問を担当している。

４．研究業績

(1)研究業績の公表
①著書 【0 本】
②学術論文（査読あり） 【0 本】
③その他論文（査読なし） 【0 本】
④学会発表等 【0 件】
⑤その他の公表実績 ・ 2022 年繊維学会基礎講座・講演（2022 年 7 月 15 日実施） タイトル「繊維産業から考える日本のモノづくり」 ・ 立命館大学福井県校友会だより・記事執筆（2022 年 7 月 10 日発行） タイトル「母校で学んだ実践的教育を福井で」 【2 本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績
なし
(3)特許等取得
なし
(4)学会活動等
・学会での役職 日本経営学会誌編集委員（2022 年 9 月まで）
・ 学会でのコメンテーター、司会活動 なし

５．地域・社会貢献活動

① -1 ① -2 県内企業キャリアアップ応援奨励金モデル企業選定委員会委員（都度開催・現在に至る） 「未来協働プラットフォームふくい」実行部門会議５（県内高等教育機関への進学、学部学科の再編、定員増）委員（2022 年 4 月 1 日 - 2023 年 3 月 31 日） ① -3 ① -4 ② ③ ④ シンフォニアテクノロジー株式会社・伊勢製作所（三重県伊勢市） 工場診断と意見交換会（2022 年 11 月 24 日）※武藤 昌三 客員教授との協働 ⑤ ⑥ ⑦

６．大学運営への参画

(1)補職
・ 入学試験本部・副本部長（正）（2022 年 3 月まで） ・ 経営学科長
(2)委員会・チーム活動
・ 特別企画講座・特講担当 ・ 学部内学生支援チーム（障害学生支援部会） ・ 学部内就職支援チーム（就職支援部会） ・ コース制検討委員会 ・ 1 年生相談担当 ・ 「大学案内」作成チーム
(3)学内行事への参加
・ 福井県立金津高等学校・入試説明会（2022 年 7 月 1 日） ・ オープンキャンパス・学科紹介実施（2022 年 8 月 7 日）
(4)その他、自発的活動など
・ 立命館大学福井県同友会・常任幹事